略歴

竹下昭寿（たけした　あきひさ）

昭和３年　長崎県に生まれる。
昭和18年　福岡県立朝倉中学校（旧制）に在学中、海軍甲種飛行予科練習生として海軍に入隊。
昭和20年　復員後、国鉄長崎通信区に勤務。
昭和34年　死去。

竹下　哲（たけした　さとる）

大正12年　長崎市に生まれる。
昭和19年　広島高等師範学校（現広島大学）卒業。長崎県教育長、県立長崎西高等学校長等を歴任。現在、長崎県社会教育委員長。
著書に、『四季のうた』、『暮らしのうた』等がある。
現住所：長崎市昭和町５－６

死の宣告をうけて

昭和六十三年三月二十七日　初版発行
昭和六十三年四月十四日　三版発行

編著　竹下　哲

発行者　砂田　保

発行所　株式会社　光雲社
東京都千代田区内神田三ノ一七ノ八（小山ビル）
電話（〇三）二五四－九一三七　〒一〇一
振替　東京五－一五八九八七

発売元　株式会社　星雲社
東京都文京区小石川五ノ一九ノ二五
電話（〇三）九四七－一〇二一　〒一一二

印刷所　神谷印刷　製本所　小泉製本

定価　一一〇〇円

©Satoru Takeshita 1988
ISBN4-7952-7279-4　C0015　¥1100E

321944

日文 701753454

死の宣告をうけて

竹下昭寿・遺書

竹下　哲・編

埼玉県立久喜
第199324号
埼玉県立図書館
図書館蔵書

光雲社

遺書を頂いて———

高原　憲

竹下昭寿(あきひさ)君が私の外来を訪ねて来られたのは、昨年（昭和33年）12月22日であった。かなり強い貧血状態であった。心窩部に小指位にふれる硬い腫物がある。それに便中の潜血反応は強い。多分、潰瘍を伴った胃の腫物であろうと思われた。

若年者ほど、悪性で進行の速いものである。明けて１月15日、外科で開腹手術が行われた。予想外なる結果に驚いた。胃の大半を占めるガンである。幽門部は今にも狭くなろうとしている状態なので、胃腸吻合(ふんごう)術が施されて腫物には手をつけず閉じられた。

２月６日自宅に帰られてから、専ら私が主治医としてお世話をさせて頂くことになった。余生いくばくもない日々の生活に苦痛がない様にしたいことと、名残(なごり)は惜しいことであるが、間違いなくお浄土詣りをして頂きたいこと以外に、私の願いはない。その日から食生活の切りかえをして頂いた。玄米飯と野菜と水の生活である。君は素直に私の申し出を受けとられて、最後の日まで何の不平もなくおいしく頂かれた精進の姿には、頭が下がるばかりである。

数日おきに私は往診して、心境を打診しながら今日一日の生活のありかたを語り、船が静かに間違いなく彼岸に到着せんことを念じた。一日一日と死と直面している自分であるとは誰し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も考えないし、また春秋に富める三十の齢では、なおさら思いもよらぬことである。手術後回復に向かわないで、次第に衰え行く自分の姿に、不安を感じられたのは当然のことである。病状については何等真相は告げられないで、ただ肝臓がやや大きくなっていたという素人だましの診断を、そのまま受けとって来られた君である。４月になって、花とともに娑婆の縁がつきるのではないかと予想されたので、時を失しない様に真実の病状を告げる時期を待っていた。

３月25日、その日が来た。思いきって船のともづなをふりはなして、船出の日がいよいよ迫って来たことを告げる日である。病状は胃ガンである。すでに不治の状態であることを宣告した。あと幾月か幾日かと数えるよりも、今日一日限りと心得て、今日一日を頂いて生きて行くべきことを語った。

何もかも我一人のためなりき
今日一日のいのちたふとし

これは昭寿君に贈った一首である。君は何等動ずることもなく、平然として私の宣告を受けとられた。人ならぬ大きな力に抱かれた君の姿に、私はただお念仏申すのみであった。この日から君の生活は明るくなり、念仏と感謝の生活となった。この日から君の新生涯がはじまり、この日から筆をとられた君の日記は尊い遺書となり、私達に光と力とを残して下さった。昭和

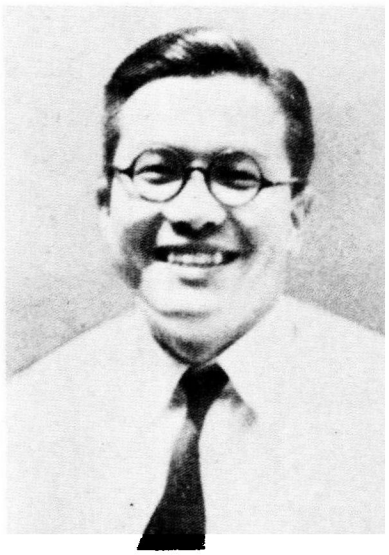
34年4月17日、散った花の後を追う様に、遂に念仏往生の大本懐をとげられた。

ただ徒らに人生航海の日の長いことが幸福ではない。喜びも悲しみも乗り越えて、一路お浄土を目ざして誓願の大船に乗托して、名残惜しくも雄々しくも船出された君こそ、人生の最大勝利者である。

昭和34年5月10日

死の宣告をうけて　目次

遺書を頂いて――――高原　憲
遺　書――――――竹下昭寿　9
遺　書（自筆原文）――竹下昭寿　23
弟のこと――――――竹下　哲　43
あとがき――――――竹下　哲　79



遺　　影（昭和33年4月5日撮影）

遺書

竹下 昭寿

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

昭和34年３月25日

久しぶりに字を書く。なんだかうまく書けないな。「死の宣告」、今までに何回も聞きなれたこの言葉だが、自分自身が本物の「死の宣告」を聞かされようとは。

今日は朝からすばらしい春日和だった。朝は食欲がなかったけれど、お昼ごろから気分は良い方だった。午後１時間ばかり眠ってちょうど目が覚めたとき、高原先生が往診された。一昨日の往診のとき、何か不安なことはないか、包み隠さず体裁ぶらずに、その不安を聞くから――と言いおいて帰られたので、今日は病状がちっとも快方に向かわない、逆に退院当時より疲労度は増してくるようだと言った。先生は、待っていたように、私の真の病気が何であるかを明らかにされた。

「胃ガン」――信じられないような病名。致命的な病状の進み。すべてはもはや手遅れだったのだ。それとは知らず、日が経つにつれて焦っていた私。母や兄たちが入院当時から深刻な表情をしていたのを、むしろ不思議に思っていたのだ。

何にも知らなかったのは私だけだったのだ。みんなは、私の姿を見ながら深く悲しんでいて下さったのだ。

先生から「死の宣告」を聞かされたときは、何だかぼっとしていた。興奮状態だったのだろう。

あと何日いのちがあるかわからない。三十数年の宿業が、残り少なくなっているということだけ。明日までかも知れないのだ。「今日一日をありがたく大切に」――高原先生のこ

の言葉が、実感となってひびいてくる。これからさき、どんな病苦にのたうちまわるかも知れない。果たすべき宿業は自分で果たして、この世を去る以外にないのだ。しかしその宿業の果てには、親鸞聖人や唯円房が渡っていられる処があるのだ。そして、15年前に往っておられるお父さんも。

この世の人間の愛情の、なんと濃やかな中に、自分は生かされていたことだろう。三十年間の愛の火の中で。しかも何よりも、仏縁に恵まれていたことの良かったこと。すべては大慈悲の唯中に、いままでもいまも生かされているのだ。

夜10時半、疲れてまとまらないが、今夜も休ませていただこう。

「ただ念仏して」

3月26日

（朝6時半）今朝5時半のアンゼラスの鐘の音が、ひときわさわやかに、カランカランと響いているのがきこえた。昨夜は安らかに眠れた。今朝も気分はいい。こういう気分にめぐまれたときこそ、安らかにお念仏しよう。病苦がいつやってくるか。その時はその時で、それを受け取っていくのだ。

3月27日

（朝6時半）昨日の昼ごろから今朝にかけて、よく眠りつづけた。今朝もまたすばらしい好天気。気分も爽快。

昨日は、母と兄が、高原先生から色紙に歌を書いて頂いてきた。それを立派な額に入れて、壁にかけてもらう。

何もかも我一人のためなりき
今日一日のいのちたふとし

ほんとに私にぴったりの歌だ。「我一人のため—大慈悲の真っ只中に抱かれて、残り少ない業を果たしていけるこの身の幸福。

ほんとにこのまんまで、お浄土に生まれさせてもらえると思えば、浄土真宗のありがたさがつくづくしみとおってくる。

昨朝から、兄ちゃんに『歎異鈔』を少しずつ朗読して頂いている。第3条まで、ゆっくりゆっくり読んでもらった。梅原先生の現代語訳もよかった。

お母さんも途中から一緒に聴聞する。お母さんも少しずつ、明るさ、元気をとり戻して下さっているようだ。あとは兄ちゃんたち夫婦に、博之、鈴ちゃんと、類まれな子どもたちがいるのだもの、大丈夫。

食物を正しくして、聞法一路の生活を送ってください。それに、大阪や西郷のおばさんたちもほんとに良い人だし。

兄ちゃんには、ほんとに心配ばかりかけて――中心になって、家の柱になって、事に当たって下さる姿、まさに愛の火が燃えてるみたい。それでも、身体もだいぶ疲れていらっしゃるだろうな。ほんとに世界一の兄を持った私の幸福。まさに心の師だったもの。それに、つた子さんも誠実そのもの。ちっとも表面には出ず、蔭から誠意をこめて私につくして下さることのありがたさ。いい姉を持ってよかった。どうかお母さんをよろしく。良い息子も２人も居るし、兄ちゃんも良い人生が送れますね。

（12時半）昼食の野菜サンドイッチに紅茶、おいしかった。病苦は出ないし、食事はおいしいし、なんと幸せなことだろう。お母さんも喜んで下さる。

午後は高原先生が往診して下さるとのこと。先生こそまさに大慈父だ。先生に診ていただきながら、この世を終わらせてもらう幸福者。大慈大悲の中心にこうしておかせて頂いて、もったいないばかりだ。何一つ精進もすることのできない恥多いこの私に、身にあまる大慈悲を注ぎ包んで下さっているとは――。

「摂取不捨の利益にあずけしめたまう。」私にはもったいないのだけれど、如来さまはそのまんまでいいとおっしゃるのだ。だからこそ私は救われていくのだ。如来の本願のかたじけなさ。ほんとに「我一人のためなりき」です。

3月29日午前

昨日午後、大内先生がおいでになる。とってもいいお話をして下さる。

『歎異鈔』第9条の「なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり。」——みなさんからよくしていただけばいただくほど、ほんとに「なごりおしい」この世ではある。人間の愛情の最大級のものを、注いでもらっているのだもの。

でも娑婆の縁がつきれば、そのまんま、かの土にまいらせていただけるのだから、こんな幸福なことがあろうか。この世でもあらん限りの愛情に包まれ、そして「ちからなくしておわるとき」にも、また即座に摂取不捨の利益にあずけしめたまうとは。

昨夜はNさんがみえられたようだけど、眠たかったので、失礼してお目にかからなかった。今日またおいでるとのこと。

Nさん、ほんとに打撃を与えてすみませんね。あなたにとって（とくに女性である）、こんなひどいことはなかったでしょう。それをよくいままでつくして下さいましたね。ほんとにありがとうございました。いいお母さんと、まれにみる愛情深いあなたに御縁があって、短くはあったけれど、いい思い出でした。どうかまた立ち直って下さい。これを機に、お念仏の世界にも縁がありますように。なんと言おうと、結

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com